

ユニバーサル映画館



障害の有無にかかわらず、一緒に銀幕の世界を楽しむ「シネマ・チュプキ・タバタ」が東京都北区に開業して約半年が過ぎた。月替わりで新旧問わず教本を上映。視覚障害者向けに全作品で登場人物の動きや情景の「音声ガイド」を聞ける

「何なの？ フェルナンド」「力なく笑うフェルナンド」。さらついたキ

障害の有無を超え集える場を 音声ガイドに共感広がる

映画の音声ガイドが、目が見えない人も楽しめるよう、シーンや登場人物の動き、場面転換を、セリフや音楽の合間に説明するナレーション。新作映画のアプリ「UDCast」を使って聞けるサービスが始まっている。各地の点字図書館などは、視覚障害者向けに主音声と音声ガイドをダウンロードして楽しめる「シネマ・デイズ」を貸し出ししており、全国で約300タイトルある。行政や市民団体によるバリアフリー上映会も広がっている。

2月に上映したブラジル映画「ニゼと光のアトリエ」は、1940年代に実在した精神科病棟が舞台。電気ショックなど暴力的な治療に反対する女性医師が取り入れた芸術療法で、回復していく患者たちを描いた。音声ガイドを手掛けた支配人の佐藤浩章さん(27)は「重いテーマに見合う言葉を探すのは、苦しい作業だった」と振り返る。吹き替えの録音には、20人の俳優や声優らが手弁当で参加した。佐藤さんと運営を切り

ヤンパスの上に黄土色をなぞっていく」。各座席のイヤホンをセットすると、吹き替えのせりふと音声ガイドが交互に聞こえてくる。



「シネマ・チュプキ・タバタ」の運営を切り盛りする佐藤浩章さん(左)と平塚千穂子さん(右)＝2月、東京都北区

盛りする代表の平塚千穂子さん(44)は、バリアフリー上映に長く取り組み、昨年9月に常設の劇場という夢をかなえた。車いすの人のスペースや、幼い子が泣いたら駆け込める親子室も設けた。工事費など1800万円は、500人以上の寄付で賄った。配給会社から映像の提供を受けた後に、作品を何度も見ながらガイドや邦画の字幕、洋画の吹き替えを自前で用意しなければならず、準備に追われる日々だ。「映画を見ながら思い

巡らす大切な時間を取り戻せた。ガイドのおかげで目頭映像が浮かぶ。治療院経営の岡野宏治さん(57)は盲導犬を連れてよく訪れる。網膜色素変性症で30代から急激に視力を失ったが、音声ガイドと出会って再び楽しめるようになった。目が見えても、作品を深く味わうためにガイドを利用する人もいる。著名な映画関係者もエールを送る。世界的な音響設計に協力。人気が優る小野大輔さんは、欧州のアニメ作品で音声ガイドのナレーションを引き受けた。河瀬直美監督の「あん」の上映では、樹木希林さんや永瀬正敏さんが舞台あいさつに立った。河瀬さんは次回作「光」で音声ガイドを取り上げる。客席が少ないために経営は厳しく、平塚さんらは広く支援を呼び掛けている。問い合わせは03(6240)8480。